

# 滞日外国人の言語生活における言語選択と言語問題意識の実態

## —中国・韓国・ネパール・フィリピン出身者の場合—<sup>i</sup>

朝日祥之（国立国語研究所）・黄叢叢（明治大学）・星川睦（明治大学）

### 0. はじめに

日本に居住する外国人の数は年々増加している。出入国在留管理庁による「在留外国人統計」（2022年12月）によれば、その総数は3百万人を超えている（出入国在留管理庁 2024）。日本における多言語化がさらに進む中で、彼らは、日本人、または日本に居住する他の言語を話す生活者との接触場面で、言語、または、コミュニケーションの不通や誤解が生じ、それによる言語コミュニケーションへの不安を抱える人が少なくないことは容易に想像できる。

これまで日本に居住する外国人を対象とした定量的社会調査として、2008年に国立国語研究所によって実施された「生活のための日本語」による全国調査が挙げられる（国立国語研究所 2009）。この調査では、例えば「日本語使用、日本語学習に関する悩み、不満」に関する質問に対し、全体の72%が「悩みや不満がある」と回答し、その理由として「日本語力が低いため不利なことがある」がもっとも多く選ばれたことが明らかとなった。

この調査は日本に居住する外国人を対象とした数少ない全国調査として高く評価される。しかしながら、その以後は、都道府県、または、市町村レベルの調査（愛知県 2022; 群馬県 2020 等）が実施されている程度で、全国規模の調査が行われてないのが現状である。この現状を受け、筆者らが参画する国立国語研究所の共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」では、関連するプロジェクトとの連携により、この全国規模の調査を web 調査により企画・実施することとした。

本稿では、2021年度に日本に居住する外国人（中国人、韓国人、ネパール人、フィリピン人）を対象に実施した調査結果を取り上げる。調査の質問項目のうち、日常生活で遭遇する6つの場面における言語選択項目、多言語話者とのコミュニケーションにおける言語問題意識に関する項目を分析する。以下では、1節で分析に用いるデータを収集した調査の概要を述べる。2節で分析に用いる質問項目について説明する。その後、3節で言語選択に関する質問項目（3.1節）、言語問題意識に関する質問項目（3.2節）、自由記述（3.3節）についてそれぞれ分析する。最後に4節で本稿のまとめと今後の課題を示す。

### 1. 調査概要

冒頭に述べた通り、本稿で用いる調査はWEB調査会社への業務委託による方式を採用した。日本に居住する外国人を対象とした定量的社会調査は、彼らをモニターとして登録している調査会社によるサービスを利用する方法がある。もちろん、住民基本台帳を用いたサンプリングも可能であるが、経費面、データ収集の効率性を考慮し、WEB調査を実施する方法を採用した。なお、本稿では、登録モニターの背景により、2つの調査会社（中国人、韓国人を登録モニターとして持ち合わせている会社、フィリピン人、ネパール人を登録モニターとして持ち合わせている会社）による調査を実施することにした。調査会社の選定にあたり、調査実施言語（日本語、英語、出身地の国語・国家語）が可能であることを条件として設定した。調査実施言語が日本語と英語のみである調査会社はあることはあるが、本稿の趣旨に合わないため、対象から外した。

これらの条件により選定された調査会社により実施された調査の概要は以下の通りである。なお、調査対象者、使用言語は表1にまとめてある。

- ・ 調査対象者：日本に居住する外国人（中国人・韓国人・ネパール人・フィリピン人）454 人
- ・ 調査時期：2021 年 10 月、2022 年 1 月
- ・ 調査手法：Web 調査
- ・ 調査項目：場面別言語使用、言語問題意識、ダイアリー調査、言語意識
- ・ 使用言語：日本語・英語・回答者の出身国の国語・国家語。回答者には回答しやすい、理解しやすい言語を選択してもらう。

表 1 日本に居住する外国人調査の概要

| 対象者    | 回答者数  | 使用言語          |
|--------|-------|---------------|
| 中国人    | 152 人 | 日本語、英語、中国語    |
| 韓国人    | 152 人 | 日本語、英語、韓国語    |
| ネパール人  | 50 人  | 日本語、英語、ネパール語  |
| フィリピン人 | 100 人 | 日本語、英語、フィリピン語 |

## 2. 調査項目

本プロジェクトで実施した web 調査は、以下に示す項目や 1 日の時間帯のそれぞれにおける言語選択などで構成される。本稿では、このうち、分析に用いる質問項目は（1）場面別言語使用と（2）言語問題とその問題への対処に関する方略に関するものである。以下にその概要を示す。

### （1） 場面別言語使用

6 つの場面で使用する言語（日本語、英語、国語・国家語、主要言語（例 マイティリ語、セブアノ語・ビサヤ語））を選択式により回答してもらった。調査で取り上げた生活場面は、生活の中でも行政、医療に関する分野、誰もが経験する可能性の高い分野の場面である。

- (a) 役所で手続きをする
- (b) 病院を受診する
- (c) 薬局で薬を買う
- (d) 美容院や理容室に行く
- (e) 宗教的な習慣について説明する
- (f) 暗算をする

### （2） 言語問題意識

異言語話者とのコミュニケーションでの言語問題とその対処に関する質問に対し、自由記述形式で回答してもらった。生活面で苦勞していること、その解決の方法についての質問の他、言語コミュニケーションにおける問題意識についての問に回答してもらった。

- (a) 苦勞していること
- (b) その解決のために工夫していること
- (c) 日本語の使用や日本語による情報のやりとりについて困っていること

次節では、ここに挙げた調査項目の順に分析を行う。

## 3. 分析

### 3.1. 場面別言語使用

先にあげた 6 つの場面における言語選択の結果を 4 つの回答者グループそれぞれについて示す（図

1、図2、図3、図4)。

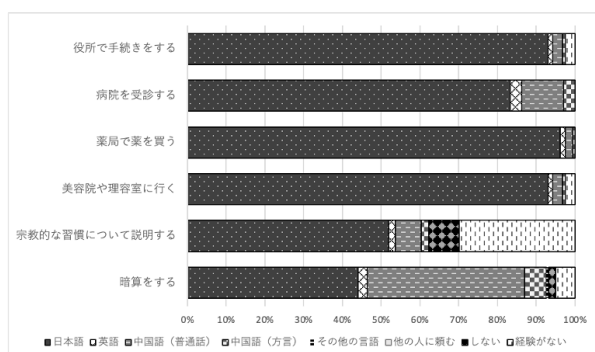


図1 中国人回答者

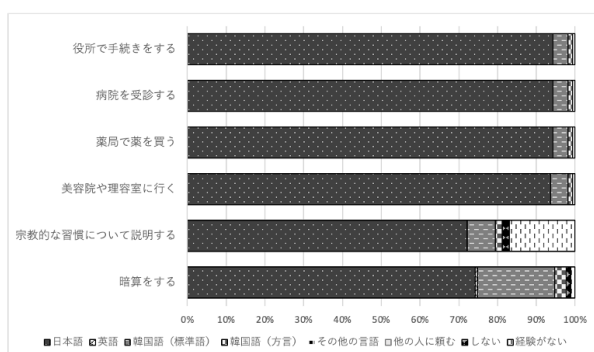


図2 韓国人回答者

図1、2を見ると、中国人回答者はどの場面においても日本語が最も多く用いられていることが分かる。ただし、「暗算」の場合のみは、日本語の使用率はわずか45%と最も低かった。それ以外の5つの場面はいずれも50%以上であった。日本語の次に、よく使用されている言語は中国語の標準語である普通話共通語と中国語(方言)であった。英語の使用も見られたが、その割合は極めて低かった。なお、「宗教的な習慣について説明する」場面でも日本語は全体の5割に留まっている一方、「他の人に頼む」(つまり、自分では説明しない)と回答した割合が約3割と他の場面より高くなっていることが明らかとなった。

次に、韓国人回答者の場合、全体的には、中国人回答者と同様にどの場面においても日本語がもっとも多く使用されていることが観察される。日本語の使用率が最も低い「宗教的な習慣について説明する」場面において、日本語の使用率が70%を超えており、中国人回答者と比べても高率である。これを除けば、「役所で手続きをする」「病院を受診する」「薬局で薬を買う」「美容院や理容室に行く」の場面では、日本語の使用率はいずれも90%以上を占めている。韓国人回答者の場合は、日本語の使用率は中国人回答者より断然高く、韓国人回答者には日本語がよく使用されていることがわかった。日本語の次に使用されている言語は中国人回答者と同様に自分の国語である韓国語(標準語)や韓国語(方言)であった。英語の使用も少し見られた。また、韓国人回答者における「宗教的な習慣について説明する」場面における「他の人に頼む」割合は約2割にとどまった。

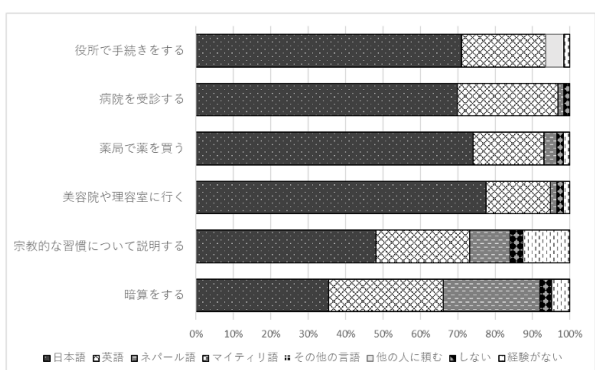


図3 ネパール人回答者

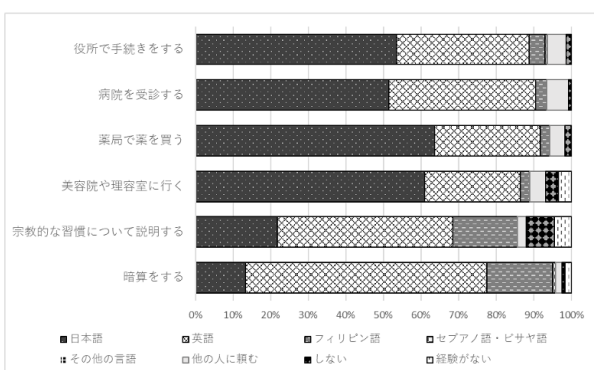


図4 フィリピン人回答者

次に、ネパール人回答者の場合、中国人回答者や韓国人回答者と比べると、日本語の使用率は比較的に低くなることがわかる。しかしながら、全般的な傾向として、いずれの場面において最も使用されている言語は日本語であった。その一方、中国人回答者や韓国人回答者と異なるのは、英語の使用

である。英語はいずれの場面においても1割から2割程度選択されていることは注目に値する。ここから、ネパール人回答者は日本語の次によく使用されている言語は国語ではなく、英語となる。英語の次に国語であるネパール語やマイティア語であった。なお、ネパール語は「暗算をする」場面における使用率が最も高く、「宗教的な習慣について説明する」場面においてもネパール語が選択される傾向が確認できた。

最後に、フィリピン人回答者の場合は、「役所で手続きをする」「病院を受診する」「薬局で薬を買う」「美容院や理容室に行く」の場面で日本語が選択されている。これは他の3つの回答者グループに共通するところである。その一方、「宗教的な習慣の説明」「暗算」場面では、日本語ではなく、英語が最も多く選択されている。この点は中国人回答者、韓国人回答者、ネパール人回答者と大きく異なる点である。このことから、フィリピン人回答者は日常生活で遭遇する可能性が高い場面において、英語に頼る傾向があることが見て取れる。この他には、いずれの場面においてもその割合はわずかであったが、「ほかの人に頼る」という回答が見られた。それも中国人回答者、韓国人回答者、ネパール人回答者と異なっている点である。

まとめると、それぞれのグループの結果から、「役所で手続きをする」「病院を受診する」「薬局で薬を買う」「美容院や理容室に行く」でどのグループでも日本語が最も多く用いられていることが共通している。中でも中国人回答者、韓国人回答者ではその率が極めて高い。一方で、ネパール人回答者、フィリピン人回答者では日本語に続き、英語が用いられることが多い。なお、この場面において、わずかだが「他の人に頼む」の回答も見られた。次に「宗教的な習慣について説明する」「暗算をする」では、特に「暗算をする」で回答者の国語・国家語を選択するケースが多く、フィリピン人回答者では英語を用いると答える人も多い。回答者の出身により言語選択のパターンが異なることが明らかとなった。

### 3.2. 言語問題意識

次に、言語問題意識に関わる調査項目（3項目）の結果を取り上げる。この設問は先にも触れたが自由記述式である。したがって、例えば、「コミュニケーションをする場合は苦労していますか。具体的なエピソードを書いてください。」という問いに、回答者は自分の考えを自由に書くという形式である。そのため、調査データをまとめるにあたり、この回答の分類を段階的に行うこととした。具体的には、先の質問については、回答者の回答内容を確認した後、最初の分類として、「苦労しているのか」、「苦労していないのか」を判定した。

同様に、「異なる言語を話す人とのコミュニケーションにおいて、何か工夫しているところがありますか。その場のやりとりをスムーズにするためにあなたがしていることについて、具体的なエピソードを教えてください。」という問いに対し、回答者が「工夫しているのか」「工夫していないのか」と判定し、「同様に他の2項目も同様に判定を行った。また「ふだんの生活の中で、日本語の使用や日本語による情報のやりとりについて困っていることがあれば、自由にお書きください。」という問いについても、「困っているのか」「困っていないのか」を判定した。以下の結果は、この判断により分類された結果である（図5、図6、図7、図8）。

まず、中国人回答者の場合は、「生活面での苦労」、「問題解決のための工夫」では、苦労しているや工夫していると回答した比率は50%以上であった。日本語をめぐる困りごとの場合は困っている割合は30%弱であった。ここから、中国人回答者が日本語の使用や日本語をめぐる困りごとを感じない人が多い一方で、日常生活で生じる問題を解決するための工夫を積極的に行っている傾向が見られる。これに対して、韓国人回答者の場合、苦労している場合は30%、工夫している場合は35%、日本語をめぐる困りごととはわずか10%の結果であった。3つの場面の項目においても、中国人回答者の比率よりは低く、韓国人回答者が日本語の使用や日本語をめぐる困りごとを感じない人が多かった。

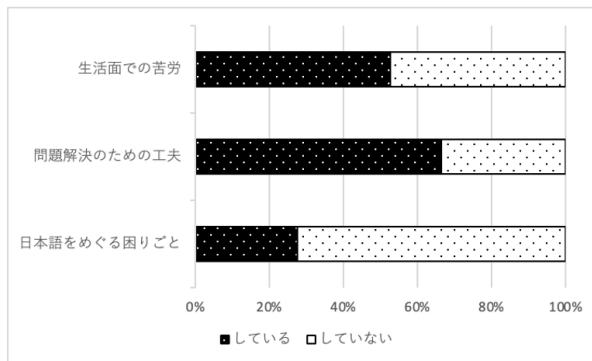


図5 中国人回答者

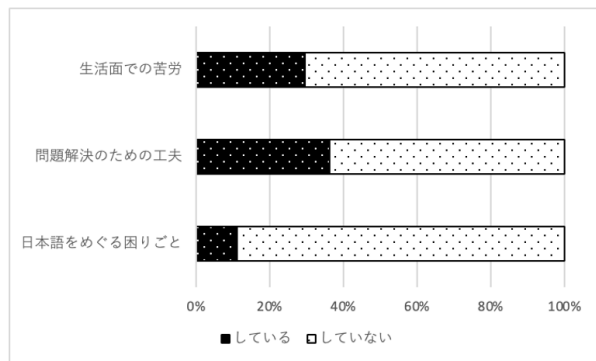


図6 韓国人回答者

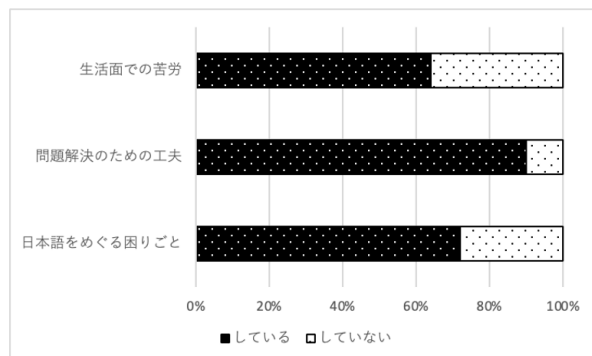


図7 ネパール人回答者

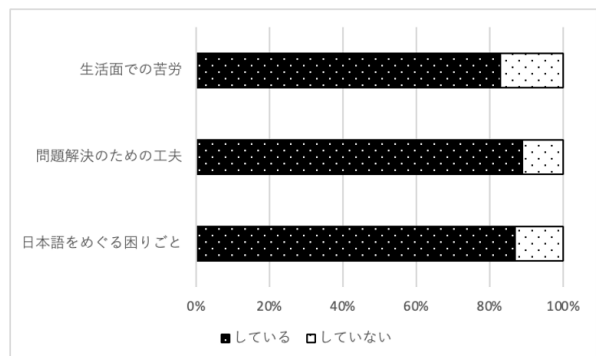


図8 フィリピン人回答者

次にネパール人回答者とフィリピン人回答者は、苦勞している、工夫している、困っていると答えた比率がいずれも高かった。具体的には、ネパール人回答者の場合は、3つの項目には、いずれも60%以上であった。フィリピン人回答者の場合は3つの項目とも80%以上を占めている。これらのことから、ネパール人回答者とフィリピン人回答者は、生活面での苦勞を感じており、その対処を行うべく工夫を行っていること、その苦勞を生み出す要因として日本語が関わっている可能性が示唆される。

これらの調査項目についても、回答者のグループによって異なる調査結果が得られた。まず、中国人は、これらの調査項目のいずれにおいても「苦勞していない・工夫していない・困りごとがない」と回答する率が高い。韓国人回答者にも類似した傾向が見られる。中国人回答者の場合、日本語の使用や日本語による情報による困りごとを感じない人が多い一方で、日常生活で生じる問題を解決するための工夫を積極的に行っている傾向が得られる。

一方、ネパール人回答者、フィリピン人回答者の場合、どの項目でも「苦勞している・工夫している・困りごとがある」の率が高い。生活面での苦勞を感じ、その対処を行うべく工夫を行っていること、その苦勞を生み出す要因として日本語が関わっている可能性が示唆される。

### 3.3. 自由記述分析

次に、3.2節で示した分類のそれぞれにおける自由記述の内容を分析する。分析にあたっては、自由記述において何らかの「日常生活で苦勞していることがある」「問題解決のために工夫をしている」とした回答者の記述を対象とする。分析手順としては、自由記述の回答内容から、いくつかまとめられそうな区分を立て、そこに分類される回答を整理した。このとき、分析方法としてはテキストマイニング等の手法も考えられるが、本稿では、著者らがそれぞれの回答内容の記述を各分類に類別する手法を採用した。

まず「日常生活で苦勞していることがある」とした回答者の自由記述では、4つに分類した。分類ごとの回答例をまとめると、表2に示した通りである。

表2 分類例（「日常生活で苦勞していることがある」）

| 分類      | 回答例                                                                                                                                                                                      |
|---------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 言語の問題   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 難しい単語が分からない</li> <li>・ 細かいことを日本語で説明するのが難しい</li> <li>・ 役場でやり取りをするときに苦勞している</li> <li>・ 職場で仕事の説明を受けてもすぐに理解できない</li> <li>・ 関西弁を理解するのが難しい</li> </ul> |
| 受信者側の問題 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 自分の母語で話すと相手にじろじろ見られる</li> <li>・ 母国語であるネパール語や英語を話すと、特に年配の方が私の顔を見ることがあります</li> </ul>                                                              |
| 文化の理解   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 言語だけでなく文化の違いがあるので言葉の真意を理解するのが難しい</li> <li>・ 物事を考える方法が異なるかと思うが、話は通じていないこともある</li> </ul>                                                          |
| 誤回答     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 私の声が小さすぎて話すことが苦になる</li> </ul>                                                                                                                   |

表2から「日常生活で苦勞していることがある」に見られる特徴から述べる。最初に「言語の問題」の場合には、「難しい単語の意味が分からない」、「役場でやり取りをするときに苦勞している」「関西弁を理解するのが難しい」といった回答者の言語能力に起因する困難や、特定の場面でのやりとりにおける困難、方言の理解への困難などがあった。これらは回答者にとって母語ではない言語を運用する際の、言語そのものに関する問題が記述されたものであるため、言語の問題としてまとめた。

それに対して、「受信者側の問題」の場合には、「自分の母語で話すと相手にじろじろ見られる」等、回答者が自身の母語を使用する際の、ある種被害的な問題であり、この点で「言語の問題」とは区別できる。

「文化の理解」は、これも異言語でのコミュニケーションをする際の苦勞ではあるが、言語そのものの問題というよりも、社会や文化が異なることに起因するコミュニケーション上の問題として区別できる。最後に「誤回答」に関しては、一般的なコミュニケーションの場での苦勞と捉えられるものがいくつかあったため、これらを「誤回答」としてまとめた。

次に「問題解決のために工夫をしている」とした回答者の自由記述を取り上げる。これらは4つの分類にまとめられる（表3）。

表3 分類例（「問題解決のために工夫をしている」）

| 分類          | 回答例                                                                                                                       |
|-------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 道具の活用       | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ スマートフォンで調べる</li> <li>・ Google 翻訳やアプリ、パソコンを活用する</li> </ul>                        |
| 話し方の工夫      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ジェスチャーを使う</li> <li>・ ゆっくり話す</li> <li>・ 絵や写真を使う</li> <li>・ 簡単な言葉に言い換える</li> </ul> |
| 他の人に頼む      | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 分からないことを友人や家族等、その言語が分かる人に聞いたり、通訳を頼んだりする</li> </ul>                               |
| 理解しやすい言語の選択 | <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 分かるかもしれない言語で言い直す</li> <li>・ どの言語なら話しやすいかを聞く</li> </ul>                           |

最初に「道具の活用」にはスマートフォンや翻訳機の活用することで回答者自身の理解を助けるといった手段を取るものとしてまとめた。「話し方の工夫」としては、コミュニケーションを取る際に、ジェスチャーやゆっくり話すことで相手の理解を促すものとしてまとめられる。「他の人に頼む」場合には「友人や家族等、その言語が分かる人に聞いたり、通訳を頼んだりする」等が見られた。最後に「理解しやすい言語の選択」の場合には、相手の一番理解しやすい言語に合わせてコミュニケーションを取るといったものが確認された。

ここで、この3つの調査項目のうち、「日常生活で苦労していることがある」「問題解決のために工夫をしている」と回答した人の内訳を見てみよう（図9、図10）。

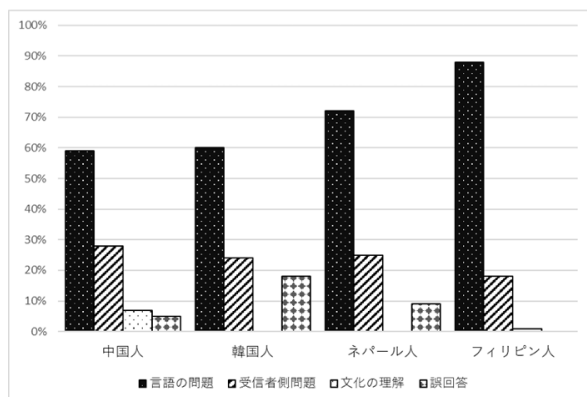


図9 「日常生活で苦労していること」

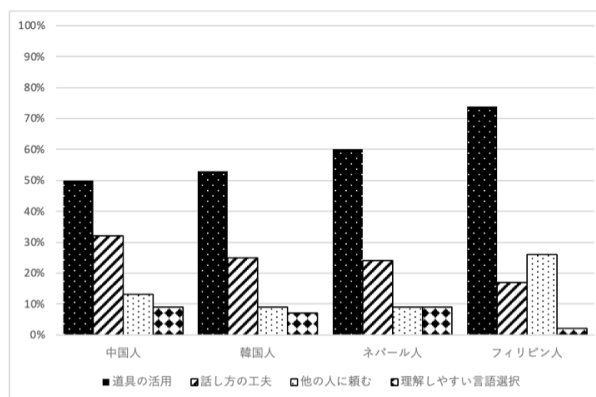


図10 「問題解決のために工夫していること」

図9から「日常生活で苦労していることがある」ことの内容については、「言語の問題」が最も回答率が高く、それに「受信者側問題」が続いている点で4つの回答者グループに共通していることがわかる。また「文化の理解」に関する苦労が中国人回答者、韓国人回答者の間にも確認できる。「言語の問題」とは、言語の発音やイントネーション、単語の理解など言語そのものに関する問題、子育てや職場でのやり取りでの言語コミュニケーションに関わる問題、「受信者側問題」は「自分の母語で話すと相手にじろじろ見られる」といった問題がそれぞれ該当する。

図10から「問題解決のために工夫していること」については、言語問題の解決のために、道具の活用（Google 翻訳やスマホアプリ、パソコンなどを利用する）、話し方の工夫（ジェスチャーを使ったコミュニケーション）、依頼（他の人に通訳を頼む）、相手が理解するかもしれない言語の選択などが多い。「道具の活用」は「日常生活で苦労する人」、「苦労しない人」に関わらず活用されるものである一方、他人に依頼することで言語問題の解決を目指すことがフィリピン人回答者に多いことは注目に値する。

#### 4. おわりに

本稿では、日本に居住する4つの外国人グループ（中国人、韓国人、ネパール人、フィリピン人）を対象に全国で実施したWeb調査の結果を用い、6つの生活場面ごとに見た言語選択、日本での生活における言語問題意識について考察を行った。その結果、言語選択に関する問題については、「役所で手続きをする」「病院を受診する」「薬局で薬を買う」「美容院や理容室に行く」についてはどの国出身の回答者においても日本語が選択される一方、フィリピン人回答者、ネパール人回答者では英語が選択される傾向が強いこと、その中で、ネパール人回答者の間では「暗算」場面でネパール語が選択される傾向が得られた。

次に、言語問題解決に関する項目の分析から、中国人回答者、韓国人回答者の間では言語問題意識がさほど強くなる一方で、ネパール人回答者、フィリピン人回答者の間では、言語問題意識が強いことが明らかになった他、言語問題を解決する工夫の方法としてGoogle 翻訳などのサービスを使用する

率が高いことが明らかとなった。また、言語問題の具体的な例としては、言語コミュニケーションに関する項目が多く、これは全てのグループに共通していることが示された。

今後の課題は少なくない。例えば、対象とする外国人グループの範囲を広げ、より大規模な調査を実施することである。おそらく、出身国の言語の違いにより、日常生活における言語選択、言語問題意識に差異が生じることが容易に想像される。その検証を行いたい。また、今回は web 調査による方法を採用した。定量的社会調査には、この他にも郵送法や調査員による個別面接法などによるデータ収集法がある。例えば、郵送法と web 調査との間には回答に質的な違いがあることが、本プロジェクトの調査でも判明している（前田他 2025）。これに加え、調査員による面接調査法により収集されるデータとの比較も行いたい。いずれも今後の課題である。

## 参考文献

愛知県（2022） 外国人県民アンケート調査報告書 令和 4 年（2022 年）3 月 社会活動推進課多文化共生推進室.

国立国語研究所（2009）「生活のための日本語：全国調査」結果報告（速報版） 国立国語研究所 日本語教育基盤情報センター 学習項目グループ・評価基準グループ.

群馬県（2020） 令和 2 年度外国人県民アンケート。 多文化共生・共創ポータルサイト.

（URL: <https://www.pref.gunma.jp/site/tabunka/4069.html>）（2024.1.9 確認）

出入国在留管理庁（2024） 在留外国人統計（旧登録外国人統計）（2022 年 12 月末）.

（URL: [https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html)）（2024.1.9 確認）

前田忠彦・石橋孝・朝日祥之・鏈水兼貴（2025）「Web コロナ関連用語の許容度・使用度に関する 2 種の調査手法による結果の比較分析」『2024 年度日本世論調査協会研究大会』同志社大学東京キャンパス（2025.1.17 開催）

---

<sup>i</sup> 本稿は社会言語科学会第 48 回研究大会における口頭発表「日本に居住する外国人の生活場面における言語選択と言語問題意識：中国・韓国・ネパール・フィリピン出身者に対する web 調査結果から」（発表者：朝日祥之、黄叢叢、星川陸、Patricio Varela Almiron）を元に加筆修正を行なったものである。本稿は、国立国語研究所共同研究プロジェクト「多言語・多文化社会における言語問題に関する研究」（研究代表者 朝日祥之）、人間文化研究機構共創先導プロジェクト共創促進研究「コミュニケーション共生科学の創成」（研究代表者 菊澤律子）、JSPS 科研費 JP20K00623 による研究成果の一部である。